

第6回（1995年）ヤンマー学生懸賞論文入賞作品

グリーンツーリズムのすすめ

―群馬県新治村の農村公園構想と「たくみの里」を例に―

（要旨）

今日日本の農村は、基幹産業である農業の不振と都市への人口流出という悪循環に苛まれ、かつてないほどの危機に見舞われている。私は、農村がそうした状況を打開するためには、農産物の効率的な生産に固執せず、「農村空間」の有する資源―例えば豊かな自然環境や伝統的な景観―を総動員していくべきだと考えている。そしてその有力な方向性として、農業・農村とリゾートを有機的に結びつけていくことがある。

一見、金太郎飴的な安易な開発が展開されたかに見えたバブル時代にあっても、地域の主体性を尊重した、その地域ならではのリゾート開発を地道に行い、成果を収めている例は幾つかある。その中で私は、ヨーロッパ等では既に主流になったとされている「グリーンツーリズム」を取り入れた開発に注目している。「グリーンツーリズム」とは、「農山漁村地域において、その自然・文化・人々との交流を低コストで楽しむ長期滞在型の余暇活動」と定義される。

最近では、政府でもこうした「グリーンツーリズム」を推進する動きが出てきているが、まだ国内での実践例は多くない。そこで本編では「グリーンツーリズム」先進国であるドイツ、フランスの事例を紹介した上で、群馬県新治村の「新治村農村公園構想」の取組を数回の現地調査に基づいて述べ、我が国における「グリーンツーリズム」の可能性と課題を明らかにした。

新治村は大規模リゾート開発華やかかなりし1980年代後半から、あえてそうした潮流に背を向け、ヨーロッパの先進事例の視察も踏まえて村全域を公園として位置づけた「新治村農村公園構想」を策定し、「グリーンツーリズム」に積極的に取り組んでいる。

例えばこの構想の目玉というべき「たくみの里」は、こんにやく作りや味噌作りが体験できる「手作り郷土の香りの家」や、農村工芸を体験するための「竹細工の家」「わら細工の家」などを旧三国街道の須川宿沿いに配置し、観光客が地域の人々や文化と直接触れ合うことを可能にさせた。こうした努力の結果、新治村には年間110万人を超える観光客が訪れるようになり、そうした観光客をターゲットにした観光農業化を指向する試みや農村景観の向上を目指す機運も生まれてきている。

しかし、都市住民と農村住民との非日常的な触れ合いを通じて「やすらぎ」を分かち合うという「グリーンツーリズム」の本旨を踏まえる時、この新治村の取組は未だ発展途上にあるといえる。そしてこうした「グリーンツーリズム」の思想というべきものを日本に定着させ、実のある都市・農村交流を体現することが求められよう。こうしたことから、農村活性化の単なる手段としてではなく、「社会政策的」見地からのアプローチが今後必要になると思われる。

（以上は入賞作品集の掲載内容を一部修正したものです。）

第6回（1995年）ヤンマー学生懸賞論文・作文募集事業の概要

- テーマ　いま日本の農業がおもしろい～その変化と対応～
- 主催　　ヤンマー農機株式会社
- 後援　　財団法人　21世紀村づくり塾

ヤンマーグループは日本農業が転機を迎えていた1990年から、厳しい中にも21世紀への夢と希望を持ち、先駆的な挑戦を試みる元気な農家やグループが全国各地に誕生しつつあることを踏まえ、「いま日本の農業がおもしろい～その変化と対応～」というスローガンのもと、積極的に未来を語りエールを送ってきた。

その中で次代を担う若者たちに農業と農村の未来について大いに議論してもらおうとして始めたのが、この学生懸賞論文・作文募集事業だった。この事業はその後も継続されており、2009年で第20回を迎えている。

なお、論文大賞者（1名）の賞金は100万円だった。さいとう淳一郎は佳作に入賞し、賞金10万円を獲得した。